

TENTI TODAY			1
会員の広場 受信メール 「兩岸猿聲～方攸敏・藤村遠山／傘寿記念 日中二人書画展」			2
随筆	「日々をいとおしみて」より「上高地にて」	宮川典子	3
随筆	今話題の“虎ノ門ヒルズ”に行ってみた	臺 一郎	4
歴史	「了解日本(日本を知る)」(15)「長崎のみどころ」(3)	兪彭年	7
回顧	有楽町慕情(12)「石坂泰三、第一生命から東芝へ」	津田孚人	9
講演会	「新三木会」		12
事務局			12

TENTI TODAY

ハマスとイスラエルの紛争で、世界情勢が一気に不安定になって来ました。民族紛争と戦争、当事者以外には分かりにくいことですがグローバルな時代にあっては必ず影響があります。スマホ時代、新聞もテレビも見ない若年層が多いので気になります。

ウクライナとロシアの紛争、長期化必至のようで世界的な関心が薄れる方向に見えます。匝瑳さん(大学のゼミ仲間)が送ってくれた「ウクライナ戦争の嘘・米露中北の打算」(中公新書ラクレ・2023年6月10日初版)、を読みました。佐藤優、手嶋龍一の対談でしたが、ロシアの専門家の話は、TV、新聞などでの報道とは次元が違い教えられるところが多くありました。マスメディアの情報で満足するのは問題と改めて感じました。

ジリジリと円安が続いています。国際間の紛争が、日本の経済、暮らしにどのような影響を及ぼすのか、現在、国内には見通せる人はいないようです。本来であれば、政治家、あるいは経済界のリーダーが、国際間の問題に積極的に関わって国内的確な情報を伝え、それによって備えができる、ということになるのでしょうか…。人も体制も、不十分で、国力低下、円安はまだ続きそうです。

9月の「敬老の日」に市主催の地区での祝会がありましたので初めて参加しました。対象は75歳以上でしたが、小学校の体育館のほぼ7割方を埋め尽くす盛況ぶりに、ビックリしました。さらに驚いたのは、車いすに乗る人、杖を持つ人が少なかったことでした。「敬老の日」などという祭りごとより、高齢者が生きがいを感じる仕事を考え、提供する方が行政の仕事として大事なように思います。当日は、地元の和太鼓チームの演技、小学生による吹奏楽を楽しみ、菓子袋一つのおみやげを貰って気分良く帰りましたが…。

栃木県の介護付き老人ホームに入居している山本さん(女性・98歳)、退屈をする
と(?)電話を掛けてきます。先日は株の話をしていました。同じ証券部門で仕事を
していた同僚(?)なので話には驚きませんでした、その元気さには驚きました。世
事、世相への関心をもち続けることは、長生きの秘訣の一つのようです。

政府は資産運用立国の御旗を掲げ、2024年からは新NISAをスタートとさせます。
銀行、証券は、チャンスとばかり運用担当者の増強をはかっていますが、運用は、簡
単ではありません。世の中”うまい話”は、ありません。慎重の上に慎重を……。自分
のお金は自分で管理し、人任せにしない、というのが基本です。

会員の広場

受信メール

「兩岸猿聲～方攸敏・藤村遠山／傘寿記念 日中二人書画展」

会期：2023年11月6日(月)～10日(金) (6日15:00より、開幕式)

会場：中国文化センター(港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1階)

主催：翰墨書道会・日本王蘧常先生顕彰会 中国文化センター 株式会社柔城

後援：中国大使館文化部 日本アジア共同体文化協力機構 日中友好会館

日中文化交流協会 日中協会 東京華僑総会 日中関係学会

上海呉昌碩藝術研究協会 中文導報社

入場：無料 (ご自由に出入りできます)

交通：日比谷線「虎ノ門ヒルズ」駅 A2 番出口より徒歩 2 分。

銀座線「虎ノ門」駅 2 番出口より徒歩 7 分。

拓殖大学教官を退任してから、「書」に凝り始め、いくつかの書道展に作品を出し
たりしていました。この度、「日中二人書画展」を開くことになりましたので、案内を送
らせてもらいます。ご来場をお待ちしております。事前にご連絡くだされば、会場でお
待ちしご案内させていただきます。

展示会は、上海在住の画家、方攸敏さんと小生(号は遠山)の書を組み合わせて、
それぞれ 20 点前後の作品を展示いたします。

方攸敏さんとは、共に 1944 年生まれの申年で、まもなく 80 歳を迎えます。彼は上
海を拠点にたくさんの花を描いて、“花王”とも称されています。

藤村遠山は中国報道に長い間携わったあと、70 の手習いで書を始め、最近では
各種の書道展示会にも出品したりしております。

ふたりの歩んできた道は全く違っても、激動の時代を生き抜き、それなりの年輪を重
ねてきました。

そこで、「兩岸猿聲～方攸敏・藤村遠山／傘寿記念 日中二人書画展」を開い
て、「傘寿」を共に祝い合おうではないか、という運びになりました。

日中間での二人展開催というのは、最近ではほとんど例がありません。日中は厳し
い関係が続いておりますが、今年は日中友好条約締結 45 周年記念であり、こういう
時だからこそ、少なくとも文化面での交流は続けたいという思いもあります。

小生の出品作品には、総合タイトルとして「書体の復活と取り組んだ清朝の先達

たち ~『金文』『石刻文字』『章草』『~』を付けました。

中国の書道会では、書聖・王羲之の天下が余りにも長く続いたため、王羲之が得意とした行草書以外の書体は、ほとんど隅に迫いやられ、中には完全に消え去った書体もありました。ところが少数民族支配の清朝時代に入ると、そうした動きを見直す気分が出てきて、「金文」「石刻文字」「章草」が相次いで復活していきます。

書道界は王羲之一辺倒から大きく変化し、多様な展開を示して現在に至っています。そこで『金文』『石刻文字』『章草』に焦点を当て、これらの書体による作品を創作、臨書と様々な形で書いてみました。

連載

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

「上高地にて」

午前7時40分、二子玉川発のバスは中央高速道路を走り、正午過ぎに松本市に着いた。そのまま西に向かい長いトンネルを二つぐり抜けると、辺りの光景は一変する。両側に3千メートル級の山々が連なり、中央に梓川の済んだ流れがある。九月末、娘夫婦と共にいよいよ上高地での3日間が始まる。娘たちは2週間前にここを訪れたばかりだ。同じ場所へ90歳過ぎの私を誘ってくれたのは、バス一本で来られるとの配慮であり、彼らにとってもよほどこの上高地に魅力を感じたのであろう。やがて、大正池が左に見えてくる。近くの焼岳が大正期に噴火して梓川をせき止めてできたので、その名がついた。美しくゆったりと流れる紺碧の水、川岸の立ち枯れの木もそのまま、自然林と感じる。

バスターミナルに着き、少し歩いて河童橋を渡る。この橋は珍しい吊り橋で芥川龍之介の「河童」という短編で一層有名になった。旅行前に再読して、彼の鋭い社会風刺に改めて感動する。橋の向かい側にホテル白樺荘がある。そこに手荷物を預け、早速、岳沢湿原に向かう。30分ほど歩くと木道が二列に並んでいて、周囲の水に漬かった草は、はや褐色がかかっている。目の前の一際高い山が明神岳だそう

だ。宿に戻り部屋の窓から外を眺める。散策マップに山の名が分かり易く記してあり、この一帯が穂高連峰だと知った。あちこち白い雲が稜線を隠しているが、上空は透き通るような青空だ。目の前の河童橋付近には、大勢の観光客が集まっていた。コーヒーを飲みながらくつろいでいると、いきなりドカンと爆発音がし、足元がかなり揺れた。不安になりフロント係に聞くと、8日前の地震の余震で心配ないとのこと。しかし、都会の地震とは異なり、恐ろしい思いをした。その後二、三回続いた。

二日目、梓川に沿って歩き、日本近代登山の父、ウェストンの碑を見に行く。彼はイギリス人で明治期に上高地に魅了され、その名を世界に広めた功労者である。山々の麓にはヤナギ、ハンノキ、シラカバ、カラ松が林立。黄葉の季節を待っているかのように今は冴えない緑である。ミヤマニワトコの実や、ノコンギクの花もごくまれに見られた。初夏の花畠の時期に来たいと思う。橋を渡り反対側の岸辺を歩き、河童橋へ戻る。往復三キロの道を歩いたが少しも疲れなし。自然のもたらす恩恵であろうか。

三日目も午後一時に帰京バスが発車するまで、風穴探しの道を歩いた。娘夫婦は、私が宿で休んでいる間も、終始歩き廻っていた。婿はカメラの名手だ。彼らは本格的な登山はしないが、山道を歩く趣味が一致し、スイスアルプスやイタリアドロミテなど、毎年出かけていた。今は外遊自粛中なので、ここで夢を果たしているのだろう。

私にとっては山の中の生活は珍しいことばかり、三人が三様に楽しんだ三日間であった。婿の写真が届いたら、私の心は再び上高地に飛んで行くだろう。

今話題の“虎ノ門ヒルズ”に行ってみた

臺 一郎（75歳）

去る10月6日、森ビル(株)が中心となって建設を進めてきた虎ノ門ヒルズ事業で四つ目の超高層ビルとなる、「虎の門ステーションタワービル」がオープンした。オープンから4日程経った10月10日、筆者は「さてさて、いったいどんな感じのビルなのだろう？」との興味や好奇心から、早速現地を訪れた。

このビルは地下鉄日比谷線の新駅「虎の門ヒルズ駅」と一体化されて建設された。新駅は一足早く2020年6月に供用開始がなされた。改札口はホーム階からワンフロア降りた地下2階。改札を出るとそのまま新ビルの地下2階駅前広場に出る。そこからエスカレーターを二つ乗るとビルの地上階だ。ビルの名前をステーションタワーとしたのも、駅直結型のビルだからに違いない。「ちょっと安易だな」とも思ったが、「ま、いいか」のレベルだ。

ちなみにビルの高さは、虎ノ門ヒルズ内の超高層では最高の266m。階数は地上49階、地下4階だ。高さが270m近いのに階数は49階しかない。「少なくないか？」と思ったが、これも「ま、いいか」のレベルの疑問だ。ビルの住所は虎ノ門二丁目となる。

実は筆者、地下鉄日比谷線ではなく、地下鉄銀座線を利用して虎ノ門駅から地上に出て桜田通りを東京タワー方向に歩いて現地を訪れた。後に調べたら虎ノ門駅からは地下通路でも直接行けるといふ。雨の日は便利だろう。ところで前述した地下鉄日比谷線の虎ノ門ヒルズ駅からビルへのアクセスは、桜田通り経由でビルに着いてから逆に辿って確認した。

さて虎ノ門一丁目の交差点から桜田通りを3～4分歩くと、進行右側に「虎ノ門琴平タワー」という超高層ビルがある。このビルの敷地には伝統的な神社がまるでビルトインされた様に建っていて、ちょっと不思議な景観だ。「金刀比羅神宮」と言い、桜田通りに面して立派な鳥居もある。

このビルと神社の敷地には、明治初頭まで四国丸亀藩の藩主京極家の上屋敷があった。藩主はなんと敷地の一角に金刀比羅神宮を設置したのだ。ちなみに辺り一帯は現在港区虎ノ門一丁目だが、1977年までは港区琴平町と言った。また四国讃岐の琴平村は、1873年まで同じ発音だが金刀比羅村と書いた。つまりビルも神社も発音は同じコトヒラなのである。

金刀比羅神社から3～4分も歩くと虎ノ門ステーションタワービルの根元に着く。歩道からビルのおっぺんを見上げると、その高いこと言ったら。しばらく見上げていたら首が痛くなった。しかもありふれた直方体のビルではない。斜め走る屈折面で直方体の四面が構成されていて、「オフィスとしては使いにくいのではないか？」との疑問

が頭をよぎったが、例によって「ま、いいか」レベルの疑問だ。

以下は、筆者がスマホのカメラで撮った虎ノ門ヒルズステーションタワーのビルの写真と、銀座線虎ノ門駅からヒルズまでの途中にあった虎ノ門琴平タワービル & 金刀比羅神宮の写真だ。神宮はよく見ると鳥居も映っている。



虎ノ門ヒルズの全体開発面積は 7.5 ヘクタール。そこに森タワー、ビジネスタワー、レジデンシャルタワー、そしてこのたびオープンしたステーションタワーの4つの超高層ビルと、幾つかのオマケのような中低層ビルが建っている。全体の延床面積は 79.2 万㎡もあって、うちオフィスが 30 万 5 千㎡、住宅が 730 戸、店舗が 170 戸、ホテルが 370 室、カンフェレンス施設 1 万 3 千㎡、バスターミナル千㎡、緑化面積 2 万 1 千㎡等となっている。それにしても「こんな巨大開発をして床は全部テナントで埋まるのだろうか？」との懸念が頭に浮かんだ。森ビルに「余計なお世話」と言われそうだ。

完成までの経緯は、2002 年に東京都が立体道路制度を活用して港区愛宕地区の都道上にビルを建設する構想を発表し、森ビルが構想への参加を決めたことで具体化した。そして 2005 年に都は環状 2 号線虎ノ門・新橋間の道路工事に着工、2014 年に地下トンネルを含む道路が完成した。その間 2011 年 4 月に環状 2 号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業が施工開始され、その一環として森ビルは高さ 247m の虎ノ門ヒルズ森タワービルを着工。2014 年 5 月 29 日に竣工した。

その後森ビルは 2016 年に森タワーの北側に「虎ノ門ヒルズビジネスタワー」を、南側では住宅棟の「虎ノ門ヒルズレジデンシャルタワー」を着工し、ビジネスタワーは 2020 年に、レジデンシャルタワーは 2022 年にそれぞれ竣工した。

さらに前述したように 2020 年 6 月には地下鉄日比谷線の新駅「虎ノ門ヒルズ駅」が完成し、ステーションタワービルが 2019 年に着工されて 2023 年の 7 月に竣工。4 ヶ月後の 10 月 6 日に開業した。これら 4 つのタワービルは二階部分が歩行者用デッキで相互に結ばれており、信号を使わずにビルの往来が出来る。これは便利だ。

また虎ノ門ヒルズの開発では、政府による国家戦略特区制度の事業認定も受けている。国家戦略特区は地域や分野を限定することで、思い切った規制・制度改革を実行し、世界で一番ビジネスのしやすい環境を造ることを目的としている。ために特区内では規制緩和、税制特例、利子補給などの適用支援を受けることができる。

“世界で一番ビジネスのしやすい環境”とは大きく出たものだ。民間が宣伝のために言い出したのではない。大胆にも政府が言っている点や、この国家戦略特区という

構想推進の中心人物があのか竹中平蔵氏であることに「えっ、そうなんだ」とやや複雑な思いが頭をよぎった。

この強みは交通条件の良さかもしれない。すなわち地下鉄利用の便がとても良い点とか、ステーションタワービルの地下にリムジンバス用のバスターミナルが設置されているとか、地下化した環状 2 号を経て湾岸高速を使えば羽田空港まで 20 分弱で着くといった点である。

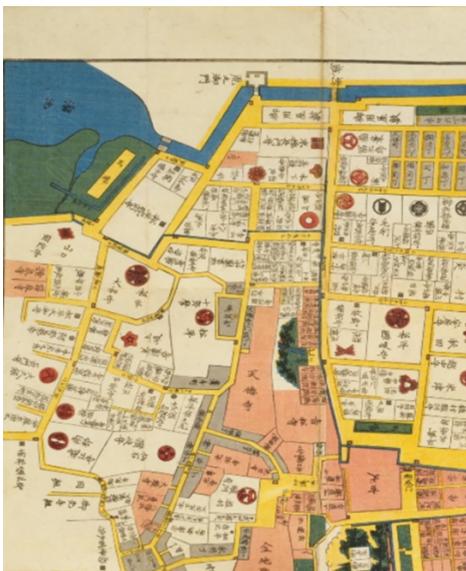
さてさて本稿の最後は、江戸時代の虎ノ門ヒルズ界隈がどんな土地であったかについての紹介としたい。港区の白金台にある港区歴史資料館等を訪れ、江戸時代の古地図や浮世絵、古い地層などから発掘された埋蔵物などを見ながら、昔の虎ノ門ヒルズ界隈はどのような土地であったのかを調べたり想像してみた。

江戸時代のこの辺りは、御府内を意味する朱引きの範囲内であった。虎ノ門の一带は、ちょうど麻布の台地と愛宕山に挟まれた低地であることから、芝西久保と呼ばれていた。その土地柄は、武家屋敷と寺社がびっしりと連続して広がり、今で言うところかなり高密度な土地利用がなされた都心部の市街地のような地区であった。

その当時今の虎ノ門ヒルズやその周辺には、加藤越中守、松平丹波守、田村右京太夫、京極長門守、青山下野守、土佐備中守、木下主計守などの大名や旗本の屋敷があった。そして前述したように、虎の御門と現在のヒルズ開発地の中間には、丸亀藩主京極長門守の屋敷があり、敷地の一角には 17 世紀ころに金刀比羅神宮が設置された。また愛宕山に近づくと沢山のお寺もあったようだ。

ちなみに江戸時代の虎ノ門は、江戸城の内濠桜田門から旧東海道へと通ずる街道の外郭門の一つであった。江戸城本丸から見て西の方角に位置したので、清龍、白虎、朱雀、玄武という四神相応のうち、西方向を守護する白虎に因んで虎の門と名付けられたようだ。この門は江戸時代の切絵図にも描かれており、門前の外濠には堰（一種のダム）が設置されていた。

なお、以下の左は江戸時代の虎の御門界隈の切絵図だ。図の上部の外濠屈折部に虎の御門や橋が描かれている。図の真中付近には緑色の愛宕山が、その 1 センチ程上の辺りが現在の虎の門ヒルズ界隈と思われる。右側の写真は明治の初めの頃の、虎の御門と門前の外濠堰である



虎の門は明治六年(1874年)に維新政府により撤去され、更に明治22年(1885年)には近接する溜池が埋め立てられ、明治36年(1903年)には虎の門の前の外濠も埋め立てられた。また大名や旗本の武家屋敷も多くが上地・接收されて、かつての武家屋敷街としての土地柄は急速に薄れていった。そして100年以上を経た現在、そこには超現代的な都市空間である虎の門ヒルズが誕生した。

「了解日本」(「日本を知る」(第15回))

愈彭年(86歳)

長崎の見どころ(3)

レジデンシャル・トンレン(居留唐人)・華僑・中国人

長崎唐船貿易の時代、日本人は唐人を、貿易のために中国と長崎を往来する来航唐人と、日本人の許可を得て長崎に定住した居留唐人とその子孫に分けた。

『中国文化と長崎県』には、「天和元年(1681年)の長崎の人口は5万2702人、7年後の元禄元年(1688年)には、長崎に来た中国人の総数は1万人と言われている」と記録されている。また、唐船194隻が長崎港に入り、そのうち117隻が貿易を許され、そのために5、6千人の中国人が2、3ヶ月長崎に滞在したと言われている」と記されている。

『長崎唐人研究』:「元和二年(1616)の戸籍によると、総人口は2万4693人と記録されている。同時期、長崎には2500人の明商人がいたので、長崎の人口の10%が唐人であったことになる」。明商人のほぼ全員が職業を持ち、当時の最先端の貿易業に従事していたため、彼らの経済水準は一般市民の平均より高かった。

明確な記録がある寛永十九年(1643年)以降の唐船を例として唐船の停泊期間を約2ヶ月とすると、乗組員の人数を一隻30人程度と計算した場合、長崎では一年の半分は常に20隻が停泊し、600人が滞在していたことになる。仮に1年間に50隻の船が入港したとしても、平均7日に1隻、良い季節を半分と数えると、平均3日に1隻の船が入港することになる」。

長崎奉行は、居住唐人の中から、家柄や才能などの要件に基づいて、総官や唐人役(唐人執事)を任命し、唐船貿易や唐人社会を直接管理した。穎川(元は陳姓)、官梅(元は林姓)、二木(元は林姓)、彭城(元は劉姓)の各家が通事を世襲した。通事の仕事は、取引間の通訳、入港する乗組員の宗教調査(カトリックは入港禁止)、積荷目録の翻訳、外国情報書の翻訳と報告(外国情報書は徳川幕府が中国の状況を把握するための重要なルートだった)、唐船館での私的活動の監視、唐船の意見、要求の上司への報告、唐船が外国から帰航時の信札(入港許可書)の交付などであった。通事は、常州口、福州口、南京口の3口に分かれていた。

居住唐人は「三江組(江南、江西、浙江を三江とする)」「漳泉組(漳州、泉州)」「福州組」、「広東組」に分けられていた。居住唐人たちが資金を出し合い、亡くなった唐人の埋葬、供養、祭祀のために悟真寺、興福寺、福聚寺、崇福寺などの唐寺を建設し、地元では「唐寺」と呼ばれるようになったのである。今でも毎年清明節になると、地元の中国人は中国の墓参りを行い、香や紙を焚いて僧侶を招き、経をあげてもらっているのである。日中国交正常化の前年の1971年、長崎県は荒れ果てていた悟真寺の中国人墓地を整備し、1974年からは長崎県日中友好協会が多くのボランティアを組織して、秋分の日には悟真寺の中国人墓地を清掃している。現在、中国

風のユニークな寺院建築で有名な崇福寺は、日本の国宝であり、長崎の有名な観光スポットの一つである。

居住唐人は、長崎の下町で自由に生活し、地域住民と雑居していた。來港唐人は唐人館が設立されるまでは、居住唐人の家や地元の人々の家にも自由に住むことができた。このため当時長崎では中華街は形成されていなかった。

多くの唐人は長崎の賑やかな町中で地元の人々と自由に交わり、その服装、話し方、物腰、持ち物、食事、宿泊、習慣は、日本人と唐人が共有し、長崎は日本と中国の文化が融合した都市となった。唐船貿易は長崎に経済的繁栄をもたらしただけでなく、唐船で長崎にやってきた中国の職人、医者、僧侶、文化人たちによって、長崎だけでなく日本各地に中国文明をもたらした。

隠元和尚は唐人が福州から住持として崇福寺に招いた禅僧で、将軍・徳川家綱を訪ね、1661年、京都に赴き黄檗宗万福寺を創建し、日本黄檗宗の開山の元祖となった。そして日本の太上天皇から「大光普照国師」の称号を授けられた。

また、彼は日本における黄檗宗の三筆の一人であり(他の二人は木庵和尚、即非和尚)、現在も万寿山聖福寺(長崎県指定有形文化財)の山門に彼が揮毫した「聖福禅寺」の扁額が掲げられている。

現在日本人が食べている菜豆は、隠元禅師が中国から日本に持ち込み、まいた種が実をつけたものである。崇福寺は日本の国宝となり長崎を代表する名所の一つとなっている。

中国の黄檗宗の僧が長崎にもたらした精進料理は、長崎の崇福寺、京都の万福寺などを通じて次第に広まり、「普茶料理」或いは「寺卓袱料理」と呼ばれるようになった。隠元和尚が日本の仏教や文化の発展に貢献したことは非常に大きいですが、中国人や日本人にはあまり知られていないため、紹介が少なかったことは、反省すべきである。これまで、日本の仏教や文化の発展に中国の僧侶が貢献したというと、ほとんど鑑真和尚のことばかりが取り上げられてきたが、実は隠元和尚の貢献は鑑真和尚に劣らない。(今後、隠元和尚の功績をもっと紹介すべきである)

長崎の名所のひとつ、アーチ型の石橋「めがね橋」は、長崎に来た中国の和尚如定によって造られ、その後、九州各地に多くのアーチ型の石橋が作られた。また、中国の書物は唐船がもたらした重要な交易品であり、日本人が中国の政治・経済、社会文化、医学を理解し、研究・吸収するために重要な役割を果たした。

長崎は経済交流だけでなく、日中間の文化交流の場にもなった。徳川幕府が二百年以上鎖国してきたことから言えば、長崎は唯一の中日交流の窓口となり、中国との縁が結ばれたのである。

現在、長崎県は福建省の姉妹都市であり、上海市と友好交流関係にある。福州市と長崎市、廈門市と佐世保市、漳州市と諫早市、上海市閔行区と大村市、南安市と平戸市、蘇州市平江区と諫早市、上海市南匯区と長与町は、いずれも友好都市である。

『中国文化と長崎県』:「鎖国体制の強化で居住唐人減少。17世紀末には、居住唐人の第一世代はほとんど亡くなっており、日本人の母を持つ第二世代は、髪型や服装を変え、長崎奉行の許可を得て「林」という苗字を「はやし」と訓読みで利用し、日本社会に急速に同化していった。また、『平野』『中山』『西村』といった母方の姓を名乗る者もいた」と記されている。

1869年、日本は欧米の圧力で神奈川(現在の横浜)、長崎、箱館(現在の函館)

を通商港として開港したので、唐人は大浦、新地などと呼ばれる外国人居留地に移り、日本在住の中国人、すなわち在日中国人となった。不完全な統計だが、長崎に住む中国人の数は、1868年に743人、1871年に447人、1880年に549人、20世紀に入ると1910年代に900人、1930年代に1000人だった。

長崎から日本各地に多くの華僑が移住し、長崎は日本における華僑発祥の地となった。移住先の新地で有名になったのは長崎中華街で、長崎の有名な観光スポットの一つとなっている。

長崎の華僑は1878年9月12日に正式に開設した長崎清国総領事館の管轄と保護下に置かれている。唐船貿易の衰退後、多くの唐人(華僑)の職業は変化し、下層階級は「三本の刀(包丁=料理人、ハサミ=仕立屋、カミソリ=頭剃り)」を職業とするようになった。日本人との結婚が増え、日本国籍を取得する中国人も増えた。

儒教寺院や中華学校も建設され、子供たちは中国の文化や言語を学んでいるが、母国語を話さない人が増え、習慣も日本化しつつある。

長崎の孔子廟の中庭には、貴重な史跡である七十二位の弟子たちの石像があって歴史的な文物となり、孔子廟も長崎の重要観光スポット一つとなっている。年月が経つにつれ日本人と同化して唐人が少なくなったが、長崎には中国文化の息吹が脈々として残っている。以前、長崎の元副市長が「長崎に流れる血の半分は中国人の血だ」と言っていたのを聞いたことがある。長崎人が特に中国人を好きなのは当然であろう。

有楽町 慕情 (12)

津田孚人(86歳)

「石坂泰三、第一生命から東芝へ」

石坂泰三を主人公とした城山三郎の小説「もうきみには頼まない」の中に、終戦後の昭和20年10月、石坂泰三が矢野恒太第一生命会長に社長職を会長の長男矢野一郎に譲りたいと申し出ると慰留されるが、年があげると、「会長、社長は、退任し、社長は矢野一郎にする」そして「私が残念に思うことが二つだけある。一つは保険種類の選定で私と違うものがあつた。もう一つもっとも気に食わないことは、後任社長を長男の一郎としたことだ」と告げられた、という場面がある。小説なので、真偽は不明だが、創業者の矢野恒太としては、積極型の石坂泰三に引き継いで欲しかったと思われるふしはある。

昭和36年(1961年)4月に入社したとき、矢野一郎会長は、トップになって15年経過していたが、入社式で「生命保険会社は、人の生命を対象商品とする事業、世の中で目立つことは不要、常に2番手で良い」という趣旨の挨拶をした。振り返れば、当時の館内は、GHQ時代とほぼ同じ状態で残され、郵便局、銀行(協和銀行有楽町支店)、診療所、理髪店があつた。理髪店は社員専用で、勤務中誰でも利用できた。矢野会長は、昭和43年(1968年)3月に大井松田に大井本社を完成させ、事務センターは郊外にという理想を実現している。

矢野恒太は、長男の矢野一郎の性格に、会社の将来を託す不安を感じていた、と考えられる。矢野一郎会長には、直接お目にかかることはなかったが、秘書室経由でご母堂のために債券を買いたい、市場で利回りの良い債券はあるか、どのくらいの条件か、至急知らせよ、というようなご下問がときどきあつた。対象は既発債、利回り計算をするのに、時間が迫られているときは大変だった。債券を買う方は珍しく、

真面目な方だなという印象をいつも感じていた。全般的には、剣道高段者で、オーソドックスな紳士、話術に長け、理想主義者に見えた。社内には、矢野家の人を誰も残さなかったようである。

城山三郎の「もう君にはたのまない」の中に、このような場面がある。

「振り返って考えると私が第一生命へ入ったことは所を得なかったと思われる。殊に人的結合に於いて失敗であった。ただし、石坂は嘆いたり悔やんだりするばかりではない。むしろ、割り切ろうとする。「それは運命であって決して私が進んで入ったのではなかったのだから仕方がない」。

石坂にとって、当てはずれがさらに重なった。追放仮指令を受ける身となったのである。戦争中、満州にある国策会社のひとつの監事をしていた。というのがその理由だった。石坂は、合点が行かなかった。それは当時良く行われていたことで、融資の関係で名義を貸したままであり、石坂はその会社の用で満州へ行ったこともなければ、ただの一度も給料を受け取っていない。当然、意義申し立てをすべきだと長男がすすめた。だが、石坂は、かぶりを振り、「やめとけ」といい「敗戦の將、兵を語らず」と言った。」

そのあと、石坂が動かないので家族で動き、「勝手にしろ」という石坂の言葉もあって、異議申請をすることになる。

国策会社の件、のほか石坂の戦争中の言動などを資料にまとめ、家族で申立書の英訳、タイプ、謄写をする。

「石坂もやむなく重い腰をあげた。いまは連合軍司令部になっている日比谷のビルへ。ビル明け渡しの際に知り合ったアメリカ軍のE代将を訪ねようと思った。」
「日比谷のGHQに行った。この頃出入りがやかましくなって、一々書き付けを貰わなければならない。嘗って社長として支配していた建物ただだけに、悲哀を感じた。GHQは水、土の両日は半休なので、E氏には逢えなかった。・・・石坂は、自分のつくったビルの前から引き返す他なかったのである」

ここに出てくる、E氏は、イーストウッド代将、「第一生命館の履歴書（矢野一郎著）」の中にたびたび登場する。GHQが第一生命館を接收したときの責任者で、折衝の中心だった矢野一郎とは、かなり気心が通じていたように見える。

石坂は、事前に矢野一郎に声をかけることなく直接訪問したようだが、この辺りにも、石坂泰三の、矢野一郎への拘りがあり、「振り返って考えると私が第一生命へ入ったことは所を得なかったと思われる。殊に人的結合に於いて失敗であった。」へつなげると見えるのだが・・・。

さて、矢野恒太、石坂泰三、矢野一郎、による第一生命関係の章は終わりにして、石坂元社長のその後を「勇気あることば（石坂泰三著）」で追ってみる。

東芝は、戦前アメリカのGE社を背景に三井系の総合電機メーカーとして発展した会社であったが、戦争で甚大な戦禍をこうむったうえ、敗戦処理の重大な時に首脳部に人材を得ず、倒産一步手前のギリギリの線に追い込まれていた。

入社に際していろいろの友人に相談をかけたが、「どうなるかお先真っ暗な会社にいくことはない」というのが、ほとんどの人の意見だった。大学同窓の五島慶太さんも、とめ役にまわったひとりだった。

それほど東芝再建は不可能とされていた。ところがただ一人、山下太郎さん（故人、前アラビア石油社長）が「面白い、やってみなさい」と賛成してくれた。一方、懇請にきた佐藤喜一郎さん（三井銀行相談役）も津守豊さんも（元東芝社長）「ぜひ乗り出してくれ」と云った。

最初わたしは社長になる予定ではなく、取締役で入って、定款を変更して会長制度をつくり会長におさまる考えだった。しかし、東芝は特別経理会社のため、株式総会がない。そこで定款変更ができないことを理由に、(昭和)24年の4月に社長になった。私は第一生命に入社したときと同様に、自分の行き先を自分で決めたことは一度もなかった。しかしいったん引き受けたうちは、思い切って東芝再建にのぞみたいと覚悟を決めた。

社長就任の第一声で東芝が設備、技術、人材を擁する点を力説し、一方、東芝は重病人であるから、一時的なアスピリン療法を避け、思い切った大手術を行う以外に、助かる方法はないと、説明した。しかし組合はなかなかいうことを聞かなかった。

わたしは組合員だって人間だ。組合側の言い分をとくと聴き、自分の信念を伝えれば話もわかることだろうと思い、組合に接近することをそう恐ろしいこととは考えなかった。だからわたしは組合員が会見を申し込んでくれば、会社だろうが、自宅だろうが、ひざを突き合わせて話もした。わたしのとった態度は組合に好感をもたれるようになった。

東芝が人員整理を発表したのは、昭和24年6月5日であったが、これにつづいたのが国鉄であった。国鉄は7月4日に、第一次人員整理3万7千人を発表し、その翌日、下山総裁がバラバラの死体となって発見され、下山事件が発生した。下山事件の影響で東芝の組合も力が少し弱まり、その後の整理はわりに楽に行われた。「下山さんのお陰で整理もうまくいった。これは、お墓まいりに行ってお礼をいわなければ……」と思ったほどである。

わたしは幸運な男だったと思う。こうして人員整理の問題が片づく前後に、GHQの日本に対する占領政策はしだいに緩和され、25年6月の朝鮮動乱は”朝鮮特需”をよび、戦後の復興景気に拍車をかけることになった。

東芝は電力需要が激増したのでそれに見合う電源開発のための重電機部門にも春が訪れ、社長就任、僅々2年にして再建に成功したのである。だが、これはわたし一人の栄誉ではない。それは恵まれた、会社内外のもろもろの諸条件が揃っていたのである。

石坂東芝新社長は、自分は幸運だったという。しかし決して好みや運だけで勝負するタイプではなく、周囲の人の意見をよく聞き、決めたとなれば一気に攻め込むタイプだったようだ。

さて、最後になるが、城山三郎は、石坂泰三が第一生命に入って所を得なかったと小説の中で回顧させているが、矢野一郎と石坂泰三の間に拘りがあったとしても、決してないがしろにしてはいない。会社として、石坂の要請には、十二分に応えていたように見える。

第一生命は東芝の筆頭株主であり、保有する東芝株の株数が全保有銘柄の中でも最大であった。東芝株のほかに、アラビア石油株を保有していたが、アラビア石油の社長は山下太郎で、石坂泰三の東芝入りを後押ししてくれた人である。

アラビア石油株は、非上場株、基本的には保有しない。事業は投機性が強く設備が主で社員は少ない、保険営業の面でも魅力に欠けたが、取得していた。

そのほか、東急電鉄も筆頭株主になるほどの大株主だったが、五島慶太が学友だったと考えると、関係があったと思われる。

石坂さんは、東芝に行かれたあとも第一生命の退職者の集まりに出席されていたそうだが、時代が異なり直接お目にかかることは無くまったく知らない。城山三郎の「もうきみには頼まない」のあとがきに、石坂泰三評があるので、石坂さんを知る参考にしてみた。

「わたしは渋沢栄一をテーマにした「寒灯（刊行時のタイトルは、＜雄気堂々＞）」を毎日新聞に連載したあと、戦後の渋沢ともいえる石坂を書くように幾つかの社から言われた。だが気乗りがしなかった。つかみにくく、それでいて波瀾万丈というわけでもない。いやむしろ例のないほど成功し、満ち足りた顔、自己完結した人生に見え、何を書くことがあるかと、と思った。

ところが、その後、石田禮助、五島昇を調べていると、石坂が登場し、また別の顔を見せた。五島が「拳骨つきの金屏風」とよぶほどのみごとな社外役員ぶり、そのおかげで五島は王道に踏みとどまった。

さらに、さまざまな本や資料、そして石坂を知る人々から思い出話の断片を耳にし、それらが一滴一滴と、わたしの石頭に孔を穿ち続けた。」

講演会のご案内

●新三木会 **第141回講演会** 10月19日(木)13:00—15:00

15:15—16:30(茶話

会)

『岐路に立つ中国社会の行方』 講師 **柯 隆氏** 名古屋大学修士

東京財団政策研究所主席研究員

申込 <https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6> (または新三木会へ

mail)

会費:会場出席(受付払い)2千円、夫人千円、学生無料

通信受講(振込)千円

A: 銀行振込:三菱東京UFJ銀行 / 船橋支店

普通預金 0132853 新三木会(シンサンモクカイ)

B: 郵貯銀行振込:郵貯銀行 普通・記号 10530

口座番号 36088281 則松久夫(ノリマツヒサオ)

今後の予定 142回 11月16日(木)13:00—15:00

演題 学徒出陣80年

講師 保坂正康(歴史学者)

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所:〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話・FAX：03－3819－7651